

# 太平洋戦争で最も悲惨な戦場は、インド北東部の「インパール作戦」、「白骨街道」



(左) インド北東部マニプール州のインパールに続く険しい山道。インパール作戦初期の1944（昭和19）年3月に英軍機が撮影した航空写真【時事通信社】

太平洋戦争で最も悲惨な戦場は、インド北東部で遂行された「インパール作戦」だ。補給路がないという杜撰(ずさん)な戦略のもと進められたこの作戦は、参戦した日本兵のおよそ9割に当たる約7万8000人が命を落としたと言われている。その主な死因は戦死ではなく餓死だ。

中国への連合国の補給路遮断を目的に旧日本陸軍が1944（昭和19）年3月、インド北東部の英軍拠点攻略を企図して開始したインパール作戦。

ほぼ全土を制圧していたビルマ（現ミャンマー）を足掛かりに計画が立案され、国境周辺は険しい山脈と谷が入

り組み、補給が確保できないことが予想されながら、進攻作戦が強行された。作戦は7月、正式に中止され、多数の犠牲者を出しながら、撤退を余儀なくされた。病気や飢餓などで死者が相次ぎ、日本兵の遺体で埋まった撤退路は「白骨街道」と呼ばれた。（編集：時事ドットコム編集部 2015年7月28日）

## 旧日本軍の「フラック」体質と兵士たちの死

### 吉田裕(一橋大学大学院特任教授)

こうした日本軍に特徴的な「特異な死」の実像を知ると、日本軍において兵士の生命があまりにも軽く扱われていたことを痛感する。

国力を超えた軍備、軍内の“身分格差”、精神主義の三つを挙げる。

「国力の限界を超えた軍備を持ったことがそもそもの原因です。日本とアメリカは、当時のGNPで見ると1対12

の差があるのに、海軍は対米7割の艦隊を保有しようとし、陸軍はソ連と戦争できる兵力と装備を備えようしました。そうすると、使える資源を全部、正面装備に集中させないと追いつかない。その結果、短期決戦主義となる。補給や情報、兵士の健康といった課題は全て後回しにされてしまった」